

◇拠点形成概要

機 関 名	北海道大学、カリフォルニア大学サンタバーバラ校		
拠点のプログラム名称	心の社会性に関する教育研究拠点		
中核となる専攻等名	文学研究科人間システム科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 山岸 俊男 教授	外 14 名	

[拠点形成の目的]

本拠点は、21世紀COEプログラム「心の文化・生態学的基盤に関する研究拠点」の成果を基盤に、その理念を継承し発展させることで、“心の社会性”に関する世界最先端の教育研究拠点の形成を目的とする。本拠点の教育研究活動を支える基本理念は、感情を含めた人間の心理・行動システムが集団・社会環境への進化的適応の所産であるという近年の人類学及び脳科学研究の成果を出発点に、心と社会の間のダイナミックな相互形成メカニズム(マイクロ=マクロ・ダイナミクス)を、進化ゲーム理論と自律エージェント型シミュレーションによるモデル構築、国際比較を含む実験・調査・フィールドワークによる経験的検証とモデルの洗練という一連の研究ステップを展開することで統合的に解明するという視座にある。本拠点計画の核となる北海道大学文学研究科人間システム科学専攻は、こうした基本理念に基づく教育研究活動を21世紀COE発足以前から10年余に亘り強力に展開してきており、国際水準の若手研究者育成及び世界最先端の研究成果の発信の両面において、特筆すべき大きな成果を収めた。本拠点計画の目的は、こうした大きな教育研究成果をあげた当専攻独自の理念と方法をさらに発展・強化し、人間・社会科学の新たな流れに向けて国際的な研究全体をリードし得るトップクラスの若手研究者を生む、世界最先端の教育研究拠点を形成することにある。

[拠点形成計画及び進捗状況の概要]

本拠点では以下の拠点形成計画を組織的に展開してきた。これらの計画は極めて順調に進捗している。

1)新しい人間・社会科学の基盤となる“心の本質的社会性”の解明:2つの基軸による展開

21世紀COEの目的でもあった“心の本質的社会性”の解明を引き継ぎつつ、さらに深化させる形で、(a)本拠点と方向性を共有する海外主要研究拠点との一層の連携、(b)経済学・政治学などの社会科学領域との実験研究を通じた連携、という2つの基軸に沿った教育研究プログラムを強力に推進する。(a)の海外主要研究拠点との連携についての主要な成果は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)進化心理学センターとの共同教育体制の構築にある。同センターのコスミデス、トゥービー共同センター長が事業推進担当者に加わり、本プログラムの運営を共同で行っている。北大・UCSB間の連携は、両拠点の若手が国際的ネットワークを作り第一線の研究者として自ら成長していくための、相互にメリットのあるシステムとして具体化しつつあり、北大サイドのみではなく、UCSBにおける若手教育の重要な柱となるに至っている。(b)の基本軸に関しては、3つの社会科学COE拠点(大阪大学、神戸大学(21世紀COE)、早稲田大学)の研究者との間で、科学研究費特定領域研究「実験社会科学—実験が切り開く21世紀の社会科学」を軸とする密接な共同研究教育体制を構築することで、マイクロ=マクロ・ダイナミクスの総合的な展開を図っている。

2)若手研究者育成のための施策の強化

21世紀COEプログラムの成功をもたらした各種の若手研究者育成施策(研究チームを中心とする教育、英語での研究発信能力の育成と国際学術誌への投稿支援、優秀な若手のPD・RA雇用、競争的研究資源配分など)を強化すると共に、海外研究拠点での研究実施のための若手研究者の派遣、合同セミナー・ワークショップの開催、一流研究者及び若手研究員の招聘を通して、若手研究者による国際的研究発信能力を一層強化する。同時に若手研究者の海外の研究機関への就職を促進する。こうした計画は過去2年間で、若手研究者が国際学術誌等に59本の論文を公刊、論文被引用数(世界標準のThompson社Science/Social Science Citation Indexによる)も2007年に年間149回、2008年に217回に到達、さらには、Annual Cognitive Neuroscience Meeting (2008)、International Congress of Psychology (2008)を含む5つの国際学会賞を受賞するなどの輝かしい成果を生み出した。これらの国際的研究成果は、University of Alberta, Michigan State Universityなどの海外の諸大学への若手人材の就職につながっている。

3)先鋭かつ集中的研究プログラム

本計画では、「心の社会性」に関する世界最先端の最重要研究テーマに資源を集中するため、21世紀COEで大きな成果が得られたテーマ、及び今後の発展が期待されるテーマを中心にプログラムを戦略的に再構築し、3つの先端的テーマ(社会行動の適応的基盤、感情の進化・生態学的基盤、文化の制度的基盤と自己維持的信念体系のゲーム論的分析)に関する、研究チームを軸とする高度の研究教育を展開している。こうした戦略的プログラムは、世界に通用する若手研究者育成の成功に加え、拠点全体で大きな研究成果を生み出すことに成功している。具体的には、過去2年間で、国際学術誌への96本の論文公刊、論文被引用数の大幅増加(2006年に350回、2007年に527回、2008年に674回;Thompson社のSCI/SSCIによる)、事業推進担当者に対する数々の国際的顕彰など、21世紀COEをはるかに凌駕する大きな国際的成果をもたらした。以上の客観的統計は、本拠点の研究活動が、発信数とインパクトの双方において、他の人文系拠点到類を見ない大きな国際的評価を獲得していることを明確に示している。

## ◇グローバルCOEプログラム委員会における評価

### (総括評価)

現行の努力を継続することによって、当初目的を達成することが可能と判断される。

### (コメント)

総長のリーダーシップにより設置された5つの総長室、6つの運営組織本部の下に、国際的に卓越した教育研究拠点形成への意欲的な取り組みが行われていると評価できる。

拠点形成全体については、創成研究機構に設置されている学内共同教育研究施設「社会科学実験研究センター」が、グローバルCOEプログラムを推進する教育研究のインフラ基盤として十分な機能を発揮しており、また、拠点リーダーは本センター長を兼ね、教育と研究それぞれを統括する副リーダーとともに機動的に拠点運営を行っているという評価できる。

人材育成面については、「正統的周辺参加」という若手研究者育成理念の下で、コア・カリキュラムを基に、個々の大学院学生に相応しい教育プログラムを作成・実施し、教育と研究の両面で成果をあげており、評価できる。また、カリフォルニア大学サンタバーバラ校(UCSB)との連携は、若手研究者の研究交流や国際的ネットワークの形成など、世界的視野を持つ研究者の育成に十分機能していると評価できる。

研究活動面については、本拠点が展開する「適応とマイクロ=マクロ・ダイナミックスの概念を軸とする“心の社会性”へのアプローチ」は、世界をリードする独創的アプローチであり、また、事業推進担当者や連携研究機関の研究者間の連携協働体制も確立しており、若手研究者を含め多くのインパクトのある研究成果を公表するなど、その活発な研究活動は高く評価できる。

補助金の適切かつ効果的使用については、グローバルCOEプログラムの予算配分に対応し、当初計画の不足分を外部資金により補うなど、適切に工夫することによって効果的に教育研究事業を達成していると評価できる。

留意事項への対応については、マイクロ=マクロ・ダイナミックスの具体化について、社会科学系COE拠点との間で教育プログラムや研究プログラムを実行し、成果をあげていると評価できる。

今後の展望については、これまで世界的広がりを持つ教育研究拠点として順調に運営されており、今後も努力されることが期待されるとともに、大学に対しては、本事業終了後において「社会科学実験研究センター」を継続させるための具体的施策の確立が期待される。